

令和元年度 家政学部 後期授業アンケート結果の講評

専攻： **家政学専攻**・管理栄養士専攻・こどもの生活専攻

講評者： 専攻主任 丹羽誠次郎

<p>質問 1～8 学生の授業や教員に対する評価について</p>	<p>授業や教員に対する評価についての設問のうち Q1～Q7 に対する学生の回答は、「強くそう思う」が 60%～48%、ややそう思うを含めると 83%～88% と概ね肯定的な評価をしていることがわかる。</p> <p>ただし Q8 「教員が作成した PCR シートは学習内容の理解に役立った」（そう思う／どちらともいえない／そう思わない／PCR シートは使用していない／の 4 択）に関しては「そう思う」が 40%にとどまっており、「そう思わない」の回答が 10%、「PCR シートは使用していない」の回答が 9%となっている。今後は、効果的な授業時間外の学習を促すような PCR シートの作成と提示を全科目・全教員で進めていく必要がある。</p>
<p>質問 9～17 学生自身の学修に対する評価について</p>	<p>自身の学修に対する評価について設問のうち Q9～Q13 に対する学生の回答は、「強くそう思う」「ややそう思う」を合わせた結果が 47%～56%と凡そ半数、「どちらともいえない」が 23%～30%、「あまりそう思わない」「全くそう思わない」で 11%～23%となっている。とくに Q10 「毎週あなたはシラバスの学習内容を確認して予習を実施した」Q11 「毎週あなたはシラバスの授業内容を確認して復習を実施した」で「全くそう思わない」の回答がいずれも 10%となっている、また、Q14、Q15 の予・復習時間を問う設問では 1/4 程度の学生が「しなかった」もしくは「30 分未満」と回答しておりシラバスの有効活用と予・復習の指導をしっかりと行っていく必要がある。</p>
<p>質問 18 学生自身の学修行動に対する評価について</p>	<p>Q18 「本授業の学習行動において、発揮できなかった能力はどれですか（複数回答可）」に対する学生の回答は 6%～10%の範囲で 12 の能力要素それぞれに満遍なく分布している。その中でも最も回答の多かった（10%）能力要素は「主体性」「計画力」「ストレスコントロール力」、最も回答の少なかった（6%）能力要素は「状況把握力」「規律性」であった。各能力要素に対して、その能力要素を意識していたから発揮できなかったことに気づく場合や、その能力要素を意識していない（あるいはその能力要素の発揮が求められていない）ために発揮できなかったことに気づかない場合もあると思われ、この結果のみから傾向を見出すことは困難である。</p>

令和元年度 家政学部 後期授業アンケート結果の講評

専攻： 家政学専攻・管理栄養士専攻・こどもの生活専攻

講評者： 専攻主任 竹村 ひとみ

<p>質問 1～8 学生の授業や教員に対する評価について</p>	<p>学生の授業や教員に対する評価 Q1～Q7 について、強くそう思う、ややそう思うの回答が 80%以上と、概ね良好な評価を得た。しかし、どちらともいえない～全くそう思わないの回答が 10～21%みられたことから、今後、各科目担当教員が一段階レベルを引き上げるよう授業改善を図っていく。一方で、Q8 の「教員が作成した PCR シートが学修内容の理解に役立った」について、そう思う 49%、どちらともいえない 41%であった。PCR シートの導入から 2 年が経過したが、より多くの学生の理解に役立つよう、さらに改善する余地がある。</p>
<p>質問 9～17 学生自身の学修に対する評価について</p>	<p>Q9 の「PCR シートの社会人基礎力の能力を發揮して予習・復習に取り組んだ」は、強くそう思うとややそう思うが 74%を占めた一方で、どちらともいえない～全くそう思わないが 26%と、科目間もしくは個人間での PCR シートの活用に差がみられた。Q10～Q13 の「シラバス内容を確認しての予復習の実施」、「予復習により学修内容への理解が深まった」について、各々予習と復習の回答分布がほぼ一致したことから、予習と復習の取り組みに偏りはなくである。Q15 の「知識・技術の向上」は強くそう思うとややそう思うが 42%、どちらともいえないが 41%、あまりそう思わないと全くそう思わないが 16%、Q16 の「到達目標の達成」は 55%、37%、8%、Q17 の「総合的満足度」は 72%、25%、4%であった。予復習への取り組みが学修内容の理解度向上、さらに満足度に繋がる授業展開が求められる。</p>
<p>質問 18 学生自身の学修行動に対する評価について</p>	<p>發揮できなかった能力要素について複数回答している。發揮できなかったと回答した能力要素別の割合は 6～11%の範囲であった。比較的割合の低かった「実行力」「傾聴力」「規律性」は、いずれも全科目で求められる能力要素でもあり、他の能力要素と比べ發揮できたと評価している。一方で、「主体性」「発信力」は、回答実数 2323 に対し各々 26%、24%の学生が發揮できなかったと回答している。授業形態別または科目毎の傾向についても分析していく必要がある。</p>

令和元年度 家政学部 後期授業アンケート結果の講評

専攻： こどもの生活専攻

講評者： 専攻主任 加藤万也

<p>質問 1～8 学生の授業や教員に対する評価について</p>	<p>授業や教員に対する評価としては「強くそう思う」と「ややそう思う」を合わせると、どの質問も概ね 80%程度であり、授業や教員に対しての満足度は得られていると考えることができる。ただし、「どちらともいえない」の割合が 20%程度あるということから、まだまだ改善の余地はあると思うので、学科教員が一枚岩になって、学生からの信頼を得られるような努力をしていきたい。</p>
<p>質問 9～17 学生自身の学修に対する評価について</p>	<p>これらの項目は「ややそう思う」と「どちらともいえない」に集中しており、概ね 60～70%という数値になっている。自身の学びについて、もっと自信を持てるような指導が必要であり、そのために授業に対するフィードバックを明確にする必要性を感じている。ただ科目によって予復習の方法やフィードバックの方法に様々な違いがあるのは当然なので、それを踏まえた上で、学生が自身の学びに対して「自信」を持てるような働きかけが教員側に求められる。</p>
<p>質問 18 学生自身の学修行動に対する評価について</p>	<p>統計から見ると、社会人基礎力の能力要素のうち発揮しきれなかったものは「主体性」と「発信力」が 10%程度で、それ以外は一桁であった。発揮できなかった「主体性」と「発信力」は、教育・保育の現場に立つものとして最も重要な要素だと考えるので、今後はより一層、授業内での工夫においてこれらの能力を伸長する体制を整えていく必要があると考えている。そのために、各授業においてどのような方法を用いているかの報告会や勉強会などを設け、全学科教員で能力向上のための手立てを構想していくつもりである。</p>